

## 14. フィールドワークは楽しい

フィールドワークは、調査する目的をもって、現場、現地に行って直接観察したり聞き込みあるいはアンケートを調査などの作業で、学術的には、客観的な成果を上げるためのツールということになります。

ここでいうところのフィールドワークは、地域での防災マップ（我々が実践しているマイマップ）を作る際の野外での活動という意味で、学問的に成果を求める活動とは異なっています。最近、よく耳にするフィールドスタディとは一線を画していて、実態観察、状況把握という程度の意味です。

情報収集は、何でもかんでも集めることではなく、先を見据えておかないと、見えるものも聞こえるものも判別できません。つまり、情報は、雑多にあふれているものを取捨選択して、整理するということが大事で、ごみ屋敷にして満足しているのでは意味がありません。

フィールドワークには、フィールドの意味を理解して行動することが第一です。そして、防災のためのフィールドワークは、主に地域に存在するリスクを特定することにあります。それに関連するあるいは起因する事象を見つけ出すという作業になります。したがって、資料や経験などをベースにして、いまの状況並びにその経過を含めて地域に潜在するリスクの洗い出しをするということになります。

フィールドワークは、実際に自分たちの地域を調べるものですが、日常的には限られたところしか見ていないので全体を見て歩くこと自体が初めてということが多いようです。いわばわが町発見という感じになりますが、防災上、大事なことの発見があります。なかなか、普段は顔を合わせない方々が、一堂に会して、一緒に地域を歩くというコミュニティの醸成にも極めて効果があります。これは、東日本大震災でも経験したことです。防災の基本です。我々は、自分が助かって、周りを助けるということが重要なことです。これは、消防や警察、行政ができることではありません。勝手知ったる地域、住民同士だから可能なことです。地域には災害上、リスクもありますが、モノ、人の面で極めて有用な資源があります。それも、このフィールドワークで掘り起こしておくということで、地域の防災資源は確実に確認できて豊かになります。

このようなフィールドワークは、頻繁に行う必要はありませんが、運動会的な感覚でこれをきっかけとして、地域の行事の中で、情報交換できる場で話題になるようになればよいと思います。地域では、何といても共有するという意識が、いざというときにありがたいパワーとなります。普段できてないものが、ことがあった時に、神業のようにできるわけがありません。普段の練習こそが勝利への道で、防災にも王道はないようです。

一度、そのような目でのフィールドワークを経験すると、地域や周りへの関心が高まりますし、よそへ行ってもそのような目でわが身の安全を常に考えられるようになると思います。机上では得られない、防災への備えに対する姿勢として糧になると思います。